

新たな方向に歩み始めた 女たちのネットワーク

人生八十年といわれる時代を迎えて、女性が様々なライフステージで多くのネットワークづくりを試み、より豊かな人生を送るための手がかりをさがしている姿が、アンケートから見えてきました。ここでは、こうしたネットワークづくりの一步前進した形態として二つの活動例を紹介し、今後の方向性を示したいと思います。

女性による異業種交流グループ 〈シーズネットワーク〉

異業種を融合し、お互いのノウハウを交換することで、新たな展開を生み出すとする異業種交流が日常的に行われるようになってから久しい。しかし、女性だけの異業種交流会となるとまだ、全国でも少ないようである。静岡商工会議所「シーズネットワーク」は昨年、静岡市に誕生した若手ビジネスウーマンたちの異業種交流会である。

今、なぜ女性だけの交流会なのか！その誕生のきっかけを会長の種本祐子さんは「男性の持つ感性と女性の持つ感性とは、微妙に違いますよね。でも、ビジネスというどちらかと言えば男性中心の社会の中で女性が一人で、それを発信し続けるのは大変です。そんな時、女性同志の感性を軸として無限の広がりを持ったフレキシブルなネットワークが作れないかしら」という声が出てきました。男性は求めればいろいろなネットワークがあるのに、女性には仕事を本気で語り合えるネットワークがないんです」と語る。

会員は三十代を中心とした二十数名。ソフト分野の人が多いのが特徴である。現在、会員相互の意

女性の感性を提案する 株式会社ソナティエイト

〈株式会社ソナティエイト〉

八人の主婦が共同出資した株式会社ソナティエイト。地域活動で知り合った彼女らは、より積極的行動的活動を目指して会社組織をつくった。女性ならではの生活体験や感性をあらゆる場面で提唱すると同時に、主婦としての立場や時間を尊重している点が、一般企業には無い、ユニークな点である。

現在は佐藤和子さんをはじめ五人が核となり、主婦はもちろん、学生、OL、老婦人に至るまで様々な立場のメンバーが、自分に合った就業形態で参加している。その活動は多岐にわたる。市内の各種イベント企画や情報誌の定期発行、県、市よりの委託事業の他、年一回女性のためのコンサートを企画、昨年はフランスのシャンソン歌手ジュリエットグレコ



グレコのコンサートにて

識の統一を計るために、異業種交流に關しての勉強会と交流会をしながら、仕事を中心とした情報交換の場作りに励んでいる。

初めての試みとして、会員の有志で昨年暮れにお歳暮の内覧会を開いた。女性の感性で選んだ品や地場産品の取り合わせは好評を博したがマーケティングの拡大までにはもう一步であったようだ。

会の方向性として、異業種の集合体である以上、同一のことを一緒にやるのではなく、メンバーそれぞれに外部スタッフとしての提案を求めながら、「シーズネットワーク」を利用してイベントをやっていく予定である。

同業者間の親睦型の交流とは違った本音のぶつかりあう交流会にしたいと言う「シーズネットワーク」。静岡の街にこれからどんな情報を発信してくれるか期待したい。

連絡先 静岡商工会議所経営課
電話 〇五四二(3)五一三



設立総会 会長あいさつ

を招き、話題となった。

「単に利益を追求するのであれば他の方法を選ぶでしょう。しかし私たちは本当にやりたいことを最優先し、コンサートも私たちが本当に聴きたい人、生き方に共感できる人をお願いしているのです。」というのがソナティエイトの方針だ。

なかでも特筆に値するのは、市内の女性経営者層の交流会である。これは発足当時から定期的に開催され、現在は会員数も倍増した。男性社会では慣例とされるこの種の交流会は、女性の間では意外なほど少ない。まして異業種間にあってはなおさらで、これを機会に女性経営者のネットワークが深まると共に、事業面での相互協力がなされるなど多大な成果を上げている。最近では男性グループとの交流も図り、性を越えた交流ネットワークを展開している。

これらの活動が認められ、全米女性学会議にも参加した。「もう性にこだわる時代ではない。」という彼女たち。けれどもその奥には、ネットワークを最大限に活用した女性の力強さ、逞しさを実感した。

連絡先 浜松市高町二〇一―二四
電話 〇五三四(54)二六六一
代表者 佐藤和子

女性たちへのネットワーク賛歌

去る一月、一七〇〇名の婦人が一堂に会し、「静岡県婦人のつどい」が行われました。男性も交えてのフォーラム「明日への第一歩を踏み出すために―女が変わる・男が変わる―」での席上、参加者からの意見、提案が続出しました。それは、戦中・戦後といった、社会観、価値観、道徳観の変革を体験してきた六十代・七十代の女性からの貴重なまなまの声でした。「家庭で男性を変えられなかったら、女性たちが連帯して社会を変えていかなければならない。それにはまず、男性に対する女性の意識変革を」という主旨に尽きました。

静岡の女性パワーはこれからますます強まり、燃焼し続けるだろうというのが実感でした。それと同時に、これが女性のネットワークの帰着点であり、出発点ではないか、と感慨を深くしました。

今回の特集で「女たちのネットワーク」を取り上げた根底には、先のような思いがあり、女性のネットワークって何だろう、必要なのか、それはなぜか、現在どんなネットワークを持っているのか、これから欲しいネットワークとは、といった女たちのネットワークの

実像に迫りたかったわけですが。

その結果、地域のあらゆる分野に女性たちが広げ、着実に根付きつつあるネットワークを、多少無理はありますが四分類して考えてみました。

- (1) 仲間づくりといった人的交流を目的としたもの
- (2) 女の生き方・自立・環境・健康・平和といった主義主張を支えるためのもの
- (3) 育児・老後といった生活するために不可欠な助け合いのためのもの
- (4) 純然たる情報交換の場としてのもの

これらのネットワークを、女性に置かれた立場・年齢・価値観などによってつくりあげ、互いのネットワークと連結したり、核となるネットワークをステップとして新たなネットワークづくりも始めています。

それは、家族のあり方、女性を取り巻く様々な問題、そして政治の流れをも少しずつ変えてゆく機動力となり得るでしょう。これからも女性は、もっと自由にグローバルにネットワークづくりに励み、男性をも含めたネットワーク、「人縁」づくりが大切な課題となるでしょう。

ベターハーフを なんと言おう

ハズバンドはなぜ主人と訳すの？
「夫」でいいじゃない。「主人」は家父長制の名残のような感じではないや。もちろん「家内」とも呼ばれたくないわ。私だっつてずっと家の中にいるわけじゃない。男性同様に社会に参加しているわ。たかが呼び方、されど呼び方。つれあい、パートナー……いい呼び方を模索中なの。

（「主人」と呼びたくない妻）

私はオジン？

くつ下まではかせてくれる女房——どこにいつちまったんだらうね。この頃はテレビのホームドラマ

マでもそんなのあまり見ないな。娘は「妻が出してくれた物を着ていくなんてオジンの証拠。今の若い男性は、着る物もたくさん持っているよ。自分でコーディネートするのよ。着せ替え人形じゃあるまいし……。」と言う。

が、着る物なんて女房まかせが楽だし、第一、一人では何を着たらいいのかわからないもんな。
（リカちゃん人形がうらやましい父親）

窓の灯りに何思う

その昔、共働きの日暮れどき、あせって駅ビルの商店街にすべり込んだものです。買い物袋を下げて駅を降り、角を曲がれば我が家の窓がみえますの。さて今宵は灯りがついているかしら……。いない？ここが天下分け目の関

スクランブル

拝借いたします……

クーマン

……ちよつとお耳を

結婚してはみたものの その1

恋愛中は気が付かなかつた。でも、結婚して不安になってきたの。彼が何のために結婚したのか。彼に「これはどうしようか」。って相談しても「君の思うとおりでいいよ」。って……。全てがそうなの。「独身の時はどうしてたの」。って聞くと「お袋がみんなやってくれたから」。だって。

糟糠の妻と想ったが……

秋の夜長、久々に妻としんみり話をした。
「もしあなたが死んだとしても、私は二度と結婚しないわ。なんと殊勝な事を言う妻と思いがらも「そんなことはないだろう」と、水をむけると「いいえ、絶対に結婚しない。子供たちと私とで暮らして行くわ」と言う。
「そんなにまでおれの事を……やっぱり持つべきはこの妻……。」と一人感激していると、
「だって、今さら男の人のめんどうを色々みさせられるのはたまにな

妻の言い分

「昔、奥様
今、お外様」
「亭主元気で留守番がいい」
世に夫族妻族を揶揄する言葉は多く、それはまたその時代の雰囲気的確に反映して面白。激しく変わる時代の流れ

夫の言い分

の中にあつて、夫と妻の価値観のずれは、ホンネの声となつて聞こえてくることしきりである。
そこで、平成元年、しばしまたに耳を傾けてこれら夫や妻のつぶやきを拾つてみたのであるが……。



風邪もふつとぶ話

風邪で寝込んでしまった土曜日、夫がいつになくやさしく「いいよ。いいよ。君は寝てなさい」と言う。
しばらくするとドアの音がして夫は出て行った様子。
「はあ、買い物に行ってくれたのだな。私にはおかげでも作ってくれるのかしら」と寝床の中で一人感激……。
ややたつて

駅員やごにも なれちゃうわ

いわ。子供も大きくなったし自由に生きてみたい。生活を共にしないボーイフレンドはいても悪くはないわね。あなたの生命保険、増額しようかしら？」だと。
妻によるとそう考えている女房は多いというがほんとうだろうか。
（妻より先には死ねない夫）

転勤族の夫

仕事柄転勤が多く、妻にはかわいそうな思いをさせています。家族の為に一生懸命働けば働くほど転勤はつきもの……。しかし実はこれも時間の問題。子供が学校に上がれば、子供第一で僕は単身赴任の生活が待っている。子供の顔もろくに見られず、父親の影は薄

「ただいま」と帰ってきた夫。「僕はもう外で食事済ませてきたからね。心配しなくていいよ。」
だって。もうすぐ帰ってくる子供と、この私はどうなんのよ……。
頭にきて、冷蔵庫の中をひっかきまわし、ある物みんな食べたなら、風邪もどこかにふつとんでしまつたわ。
（一味違った思いやりを持つ夫の妻）

結婚してはみたものの その1

結婚退職して今頃は新婚の幸福を存分にかみしめているはずなのに、夫の帰宅が遅い為に昼も夜も一人で御飯を食べ、見知らぬ土地で私の話し相手はテレビ、という寂しい毎日。
結婚は女の生活を180度変えてしまふけど、男には武器にこそなれ何も変化はもたらさない。結婚して良かったと思うときは、との間に、「朝起きると飯ができてるとき」と答える男が多いとか。所帯を持つてますます仕事に箔のつく男とは裏腹に、妻はしよせん家政婦でしかないのかしら、と疑問をもつてしまふ。

（結婚前は夫にかしづかれていた妻）



理想の時代

「女が経済的に自立をし、男も生活面でしっかり自立をする時代がくれば、結婚をする意味も違ってくるわね。あわててとんでもない人と結婚する必要はないんだから、真に人間的な結びつきで結婚を考える様になる」と、うっとりしてつぶやく私に夫が言った。
「ほう、そりゃ君にとっては受難の時代だね。」
（夫に人間的魅力をわかってもらえない妻）